

Ⅳ 男性不妊症に対する漢方治療の検討

神戸大学大学院医学研究科腎泌尿器科学分野¹⁾
英ウィメンズクリニック²⁾

岡田 桂輔^{1) 2)}、賀来 泰大¹⁾、田中 幹人¹⁾
石田 貴樹¹⁾、千葉 公嗣^{1) 2)}、松下 経¹⁾
塩谷 正英²⁾、藤澤 正人¹⁾

【目的】

男性不妊症に対する非内分泌療法としての補中益気湯の効果が不十分な症例に対して、八味地黄丸に変更した場合の効果について後方視的に検討した。

【対象と方法】

乏精子症あるいは精子不動症を呈し、非内分泌療法の適応と診断され、補中益気湯およびビタミン製剤が開始となった患者のうち、3か月以上投与するも効果が見られないか、あるいは一定の効果は認めるも効果不十分と判定され、精液所見の改善を期待し、漢方薬のみ八味地黄丸に変更した症例を対象とした。2017年1月から2018年9月までの間に八味地黄丸に変更した症例のうち3か月以上の観察期間を得られた40例が対象となった。年齢、FSH、LH、総テストステロン値および変更前および3か月後の精液検査所見(精液量、精子濃度、精子運動率)を比較検討した。さらに精子の運動の質的評価が出来るSperm Motility Analysis System (SMAS)を用い、SMASから得られる複数のパラメーターから独自に導き出したSperm Motility Value (SMV)も比較検討した。また妊娠に至ったかについても可能な限り追跡調査を行った。

【結果】

平均観察期間は7.1カ月であった。漢方薬変更前後の精液量、精子濃度および精子運動率は、それぞれ $3.13 \pm 1.43 \rightarrow 3.03 \pm 1.18$ ml ($p=0.31$)、 $17.1 \pm 20.82 \rightarrow 26.85 \pm 24.16 \times 10^6$ /ml ($p=0.012$)、 $24.78 \pm 14.61 \rightarrow 30.29 \pm 15.23\%$ ($p=0.055$)と精子濃度の有意な改善を認めた。またSMVも $68.58 \pm 51.44 \rightarrow 104.99 \pm 79.94$ ml ($p=0.018$)と有意な改善を認めた。観察期間が短いものの、14例(35%)で妊娠を認め、うち1例は自然妊娠であった。

【結論】

補中益気湯による精液所見の改善が不十分と考えられた症例で八味地黄丸に変更したところ、投与3か月時点で精子濃度は有意に改善し、運動率も有意差は認めないが、改善傾向であった。運動能の質的評価であるSMVは有意に改善認めた。また抄録提出時点で14例に妊娠を認め、うち1例は自然妊娠であった。